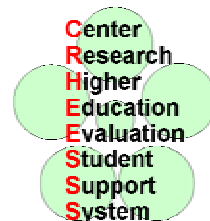


週刊センターニュース No.52



第52号(2005年3月11日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

下記研究会の時間帯が変更となりました。
(前号センターニュースで、第1回専門職研究会の開始時間を14時30分とお伝えしていましたが、下記の通り10時からとなりました。)

第1回専門職大学院研究会

日時: 3月17日(木) 10:00~11:30

会場: 総合教育棟南棟2階 大会議室

テーマ: 「アメリカにおける教員資質向上策についてー日本の中教審論議を踏まえてー」

報告者: 八尾坂 修(九州大学人間環境学研究院 教授)

共同学習会のご案内

第66回 日時: 3月22日(火) 16:20~17:50

会場: 総合教育棟南棟2階 大会議室

報告者: 日向 繁(学生部学生支援課課長補佐)

題目: 「新設されたボランティア相談窓口について」

趣旨: 学生部に今月新設されたボランティア相談窓口が、どのように機能すべきかについて、他大学の取り組み例などの紹介を交えて、問題提起する。

第67回 日時: 3月24日(木) 10:00~11:30

会場: 総合教育棟南棟2階 大会議室

報告者: 清原 岑夫(金沢大学 元教授)

題目: 「大学教育学会について」

国際シンポジウム「大学と社会」参加報告

1月24日、大阪大学大学教育実践センター開設記念国際シンポジウム「大学と社会」に当センターより堀井、西山が参加した。

1日目は、「大学 - ひとつと、経済、そして地域社会の成長に向けて」(マイケル・ビチャード卿)、「教育の質評価 - 大学にとって価値あるプロジェクトか?」(ロナルド・バーネット氏)、「世界経済における高等教育の再定義」(リチャード・イエランド氏)など海外の3名による講演含め、5つの講演とパネルディスカッションが行われた。学生へのサービスと顧客としての意識、地域貢献、企業との連携など世界的な大学改革の流れは同じであるとの印象であった。パネルディスカッションでは、「大学と社会とは?」について議論されたが、最後に大阪大学副学長の鷲田清一先生がその内容をよくまとめられたので紹介したい。

大学での研究は独創性を追い求める。したがって、大学の役割においても、大学は大学にしかできないことをすべきである。大学と社会との critical distance が重要である。社会のニーズといわれるが、それに従うのではなく、大学が、そのニーズを批判的にとらえ、社会にとって何が必要かを自ら提示することがその使命である。自己言及的に変化していく予測のつかない社会で、そのときそのときで何をすべきかを自ら考える能力の養成を大学教育は担うべきである。研究では独創性がもっとも重要

であり、そして独創性、創造性は未規定な状況を生き抜く能力であり、その養成が高等教育に求められる。全く同感であった。(文責 西山)

2日目は、第1部会、第2部会に分かれて講演が行われた。筆者は、第1部会でイギリスの研究評価動向について話を聞いた。イギリスの研究評価は、Research Assessment Exercise (RAE)と呼ばれる独立機関によって行われている。アール・キーモンズ教授(立正大学)は、イギリスの新聞のRAEに対する批判記事に基づいて研究評価の問題点を整理された。本シンポジウムでは、RAEのロバート卿による講演が予定されていたが、急病のため急遽来日ができなくなり、その代役としてキーモンズ教授が講演された。両者の意見を同時に聞くことができればより有意義であったかもしれない。

RAEによる研究評価の影響はきわめて大きいものであった。現在までにすでに2回のRAEによる研究評価が実施されているが、改善がみられないことを理由にいくつかの大学で、学部の閉鎖が現実のものとなっている。評点が相対的に低いという理由で閉鎖された例もあるという。医学部の放射線科、麻酔科や外国語学科など実学分野での閉鎖例が目立ち、評価の妥当性が疑問視されている。ケンブリッジ大学の建築学科も相対的に評点が低いことにより閉鎖の危機にさらされたが、産業界からの強い反対により閉鎖は回避された。

RAEの研究評価に対する批判は、常識的な予想の範囲内であった。各研究分野の違いが考慮されていない、そもそも発表論文のカウントに終始し、研究の内容を評価できる力量を持っていないなど、批判にさらされている。オーストラリアでは、同様の研究評価の取り組みは取りやめになったという。評価の難しさについては世界的にも議論の途上にある。(文責 西山)

第二部会は、ロンドン大学教育研究所部長のロナルド・バーネット教授による"Quality - A Virtuous Project" (「高等教育の質評価 - 大学にとって価値あるプロジェクトか?」)と題する講演と、大学評価・学位授与機構評価研究部の米澤彰純助教授によるコメントから構成されていた。

バーネット氏は、「"Quality"とは何か」という問いかけから始めて、「Quality」への反対意見、イデオロギーとしての"Quality"、"Quality"の正当性へ疑問などを説明され、質評価を価値あるプロジェクトとするため「Quality assurance から Quality enhancement へ、説明責任から集団での自己改善へ、教育に関する職業意識の開発、改善・前進・学生の発達という視点での議論」といった提言を出された。また、「Quality」には、学生、教師双方からの視点が必要であるとも述べられた。そして、最後に、Diana Green 氏の"Quality in Higher Education?"から「"Quality"とは哲学的観念である」という言葉を引用し、「"Quality"という言葉には高等教育の希望、その可能性、その人類に対する重要性、そして学問分野での協力関係への希望が単なる「希望」ではなく、活気に満ちあふれた終わりのないプロジェクトであり、それには、エネルギーで夢想的で思いやりのあるリーダーシップが求められる」と締めくくられた。

この報告に対して、米澤氏は、1.日本においても、Quality Assurance(QA)についての議論が必要である、2. QA への体系的な取り組みとしての認証評価、3. グローバルな視点を取り入れた(外圧による)改革の3点を取り上げられ、それぞれについて、「1. 卒業率がOECD ないで一番高い、その一方で定員充足していない大学がある、就職活動を卒業のかなり前から始める(企業が大学の教育内容を評価していない証拠)、日本の高等教育支出(対GDP比)はかなり低い。2. 平成16年度からの認証評価が義務化、客観的でない主観的な評価導入。3. 日本の認証評価はアメリカモデルの借用から始まっている、グローバルスタンダードモデルの導入と言われるが政府と大学とは同床異夢である、Who should evaluate?/ What should be evaluated?が問題である。」といったコメントを述べられた。(文責 堀井)